



TITLE:

## [第1セッション] 質疑応答

AUTHOR(S):

森田, 敦郎; 山本, 博之; 星川, 圭介; 西, 芳実; 岩城, 考  
信; 林, 行夫; 弘末, 雅士

---

CITATION:

森田, 敦郎 ...[et al]. [第1セッション] 質疑応答. CIAS discussion paper No.31 : <東南アジア  
学会関西例会ワークショップ報告書>洪水が映すタイ社会 --災害対応から考える社会の  
かたち 2013, 31: 31-33

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228583>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

## ■ 1960年代以降の生業変化、暮らし方の検証から 洪水対策を考える必要性

**岩城** 現在の洪水対策の様子をみると、かなり混乱があると言えるのではないかと思います。たとえば、3月にノンタブリーのある住宅を見に行きました。そこのある一家は、一つの家は高床式住宅で床高をキープしている。もう一つはさらに床高を高くして「スーパー高床」にしている。一方でその対岸にある家は、洪水はあまりこなくなったので、地床式住宅みたいな床高の低い家を造っていたのです。

今回の洪水が起こったとき間接的に聞いたのですが、床高が低い家を新しく建てた人も、「もう一回高床に戻さなければだめだ」と話していました。また、「やっぱり政府の洪水対策は信用できない」と話していたりもします。

ですから、1960年代から1980年代の一つの流れとしては、経済的な側面の影響がかなりあると思われます。ノンタブリーでは、現在でも農業をしている人がけっこういます。日本ではあまり報道されていませんが、今回の洪水被害でロンスアンの農作物は全滅です。タイでもっとも高いドリアンの産地はノンタブリーあたりにあるのですが、そのあたりの農地、果樹園が全滅して、木がすべて枯れているのです。果樹というのは、植えてから最低5年くらい収穫までに時間がかかるのですが、それがすべて水没してしまいました。

一方で、それでも被害の少ない人もけっこういたわけですね。兼業農家のケースと、専業で、ブランドとして農業をしていた方たちとで、かなり被害が違ってたりする。そういう人たちは、家の造り方の意識が大きく変わってたりすることがある。

ですから、柳澤先生のご指摘どおり、1960年代あるいは80年代の洪水対策、地域に流れ込む水の変化、あるいはその地域の住宅の変化と生業変化、ライフコースみたいなものを検証していかなければいけないと思っています。今年の8月にはそういう調査をしたいと考えているところです。

## 第1セッション 質疑応答

**森田敦郎(大阪大学人間科学研究科)** 私も数年前からエンジニアの研究を始めようと思っていて、その関係でおよそ考えていた話があったところに洪水が起こりましたので、今回のお話は関心をもって聞かせていただきました。

私は主に星川さんにおうかがいしたいのですが、洪水や溢水が起こると、いつもRID(タイ王立灌漑局)が槍玉に上がるというか注目されます。実際に、全体のきちんとしたマスタープランがなかったのだと思いますが、全体のプラクティカルなプランでは、灌漑局は基本的・実質的にはBMA(バンコク都)に対する補助的な役割をしていたと考えてよろしいでしょうか。

つまり今回のお話を聞くと、広域でどのように水をうまくはけさせて、流通させるかが洪水防御でもっとも重要だったと思いますが、それについてRID独自のプランや計画など考えているものがあつたわけではなくて、どちらかというとバンコク都が出してくる首都防衛プランに協力するかたちで、たとえばオペレーション対策とか、そういったものを受け身的に考えるという理解でよろしいのかという質問が一つです。

もう一つ、水門のオペレーションをRIDが決めているというお話でした。そのとおりだと思いますが、このような洪水の場合には、もっと細かいレベルでの操作というか、日々変わる流量に対するリアルタイムでの開け閉めが重要になるのではないかと思います。そういったところについてのRIDの方針などがありましたらお聞かせください。

**山本博之(京大地域研)** まず星川さんにうかがいます。タイを研究されている方には基本的なことなのかもしれませんが、星川さんのご報告にバンコク都と政府という言い方が何回か出てきました。バンコク都と政府というのは、意思決定の主体としては別のものなのでしょうか、同じものなのでしょうか。そもそもバンコク都の範囲はどこまででしょうか。輪中堤の内側だけバン

コク都なのか、外側も含めてバンコク都なのかといったバンコク都の広がりを見せてください。

岩城さんには、漠然とした質問になってしまうかもしれませんが、水とコモンズについてお尋ねします。バンコクで水がコモンズだったというお話をうかがって、高床式住宅は水を下に流すという意味でコモンズとしての水に対する対応であることはわかるのですが、土盛りをするというのは、水をコモンズにするよりは私の領域を作ってしまう、そこに入ってこないでほしいという対応であるように聞こえました。

そう考えると、高床式住宅と土盛りは、水に対する臨み方が違うような印象を受けました。岩城さんがどちらも伝統的な捉え方としてまとめているのはどうしたことなのか、また、いまの私の捉え方はどのあたりを修正すべきなのかを教えてください。

### ■ バンコク都とタイ政府との関係と 水門・水路操作におけるRIDの役割

星川 まずバンコク都と政府の関係からお話しします。バンコク都と政府とは異なる意思決定主体であるという前提でお話ししました。バンコク都というのは、タイのなかで唯一、知事が選挙によって選ばれます。他の県の知事は内務省からの派遣で、その意味で意思決定は政府と同一と考えてもよいのですが、バンコク都に限っては都知事が選挙で選ばれるので、今回も政府と利害が対立することがしばしばありました。

バンコク都の範囲については地図で示しませんが、輪中堤の外にも及んでいます。バンコク都の堤外地洪水対策では、堤外地というのはバンコクの堤外地を念頭に置いたものとなります。ですから、バンコクのなかでも利害対立が起こるわけです。

RIDとバンコク都の計画とか水門操作の権限の振り分けですが、どのような利害をどのように調整しているのかについては、私の理解が不足しています。RIDはご存じのとおり、第1管区(北部)とか第5管区(中部)というように管区が分かれていて、それぞれの管区が洪水対策計画を立てます。首都圏に対してはバンコク都とRIDが協力というか連携して計画を立てているということだろうと思います。どちらが主導権を握っているかまでは、私にはわかりません。

水門とか水路に関しては、バンコク都の排水局が管轄・操作する水路・水門と、灌漑事務所が管轄・操作する水路・水門があります。通常は互いに調整しあいながら操作しているのだと思いますが、それが今回の洪水の際には機能しなかった。バンコクと政府というか

バンコクとRIDとの間でどのように排水を行なうかが一致せず、水門を開けるか、開けないかを巡る意見調整ができなかったという面があります。

### ■ 土地についての考え方の変化にともなう 共有財としての水に対する意識の変化

岩城 ロンスアンはたしかに土盛りしているのですが、水をロックアウトしているわけではないのです。洪水の水は、上流から栄養分たっぷりのシルトを含んで流れてきます。ですから、畝の上のほうには水がかからないようにして、あるいはかかってもかかる部分は可能な限り少なくして、一方で下の部分には大量に水を入れることが重要になるのです。

そのために、ロンスアンでは畝の部分に斜めに竹竿などをさして、潮汐の力などを使って一気に水を入れたり抜いたりする。この竹竿の角度を季節によって変えたりして、潮汐の影響などを見ながら水を入れたりします。

ただし、今回のように大きな洪水が来たときは、ロックアウトせざるをえません。しかし、1mくらいの土嚢を作っても結局守ることはできません。ロンスアンは、本来は水を完全にロックアウトするのではなく、ちゃんと入れていかないと栄養が回らないものなのです。

西芳実(司会) 共有財としての水に対する考え方が変わったのではないかという話についてはどうですか。

岩城 それはたぶん大きいと思います。とくに土地というものが明確になってきてから、共有財としての水という考え方はけっこう変わってきたのではないかと思います。

20世紀初頭ごろから、タイは爆発的に都市人口が多くなるわけですが、それとコモンズという考え方、とくに水というものに注目すると、タイのいささか過熱気味の土地開発とか、そういうものも見えてくるのではないかと。ちょっと漠然としていますが、そういうことは言えると思います。

### ■ 2011年洪水被害の概要 ——死者数、浸水被害、冠水被害

林 今回の洪水でどれだけ被害があったか、情報を提供していただけたらありがたいと思います。

星川 被害について、具体的数字をこの場であげることにはできないのですが、ご存じのとおり、ナワナコンをはじめとした工業団地が冠水し、日本企業はかなり被害を蒙りました。堤防の北側の地域に関しては水がすべて滞留する状況になりましたので、堤外地の住宅

も相当長く浸かりました。死者については500人くらい亡くなったと記憶しています。多くの被災地域では他の県への避難を強いられましたし、避難もできず水に浸かって家の中でずっと過ごさねばならなかった人も相当いました。

堤内では、北のほうから堤を破るようなかたちで水が入ってきて、バンコクの北部もかなり長いこと冠水状態に置かれました。ドンムアン空港も数か月にわたって水に浸かる状況になりました。

**弘末雅士(立教大学)** いまの話との関連で、洪水の500人の死亡者の問題ですが、歴史的に考えると、洪水のあと衛生環境が悪化することが予想されますが、現代は、その部分の死者はそれほど多くないと考えていいのでしょうか。そのあたり何かデータがいただければと思います。

**星川** 死者数の内訳については私も全体を見ているわけでありませんが、新聞記事や各県が出している断片的な資料を見る限り圧倒的に溺死が多いはずです。漏電による感電死もおそらく1割程度あるのですが、溺死がほとんどです。老人、子どもが溺死するケースが多かったように思います。

衛生環境に関しては、たしかに悪化が懸念されていて、いろいろな対策もとられたのですが、感染症による死者が出たかどうかまでは把握していません。

**森田** 死者数について、私も定かではないのですが、500人の死者というのは、去年の洪水の死者数の総計ではないかという気がします。8月に土砂崩れや鉄砲水で220人くらい亡くなったように思います。それが含まれているとすると、中部の洪水で亡くなった方の数は200人ぐらいの可能性もあると思います。

**星川** そうかもしれません。

## ■ 2011年洪水は、自然災害であると同時に社会問題として受け止められている

**西** タイでは洪水はくり返されてきたということですが、今回の災害はタイの災害の歴史のなかではどれくらいの大きさ、衝撃をもって受け止められているかについて、お話があれば簡単にお願いします。たとえば、これまででもっとも被害規模が大きいとか、浸水地域が広い、死者が多い、あるいは前の災害とくらべるとそれほどでもなかったとか、そのような感覚的なものがあれば、付け加えていただけたらと思います。

**岩城** 20世紀でもっとも大きかったのは1942年の洪水です。私が知っている家では、1942年は床上から1mくらい浸水したそうです。伝統的に、洪水による浸

水被害を読みきって、その土地の高さを考えたうえで床高を決定してきましたので、80歳くらいのおばあさんですが、1942年のことはよく憶えているそうです。そのおばあさんの感覚だと「今回は2番目にすごかった。1942年のほうが水は多かった」とのことでした。今年の場合、その住宅は床下10cmくらいまで水がきたようです。1942年には日本政府もかなり援助を出しています。死者はそれほど出ていません。その後、伝染病は出ましたが、直接的被害があったということは、私が見た資料だと出ていないです。ただし、2、3か月バンコクは水没しています。

**星川** 最近のバンコクの洪水でもっともひどかったのは、たぶん1983年だと思います。そのころと比べたら、その洪水の後に建設された堤防が今回役割を果たしたという意味で状況が変わったこともありますし、バンコクを取り巻く状況が過去と比べて大きく変わったなかで今回の洪水が発生したという意味でも、過去の例と単純な比較はできないように思います。ただし、バンコクとその周辺都市との関係が変わりつつあるなかで今回の洪水が起こって、その受け止められ方が昔とは違う、自然災害であると同時に社会問題として受け止められているのではないかと思います。

**西** ありがとうございます。第1セッションはここまでとします。